

転生王子 は TENSEIOJIHA DARAKETAI
タラけたらいい。



朝比奈 和

Asahina Nagomu

ヨクヨウ

ディアロスと呼ばれ、
恐れられる伝承の獣。
見た目に反して大の甘党。

ヒスイ

少女の姿をした精霊。普段は
穏やかな性格だが、怒ると怖い。

ヒューバート

次兄。将来ゴリマッチョ
種実の筋肉至上主義者で、
ちょっとおバカ。

ステラ

長姉。はかなげな
色気を漂わせる、
冷静沈着な美少女。

アルフォンス

長兄。弟フィルのことに
なると周りが見えなくなる
真性ブラコン。

レイラ

次姉。勝気だが愛嬌が
あって憎めない性格の、
ザ・お姫様。

ファイリス王妃

フィルの母。モデル並みの
スタイルを誇る柔和な美人。

マテイアス王

グレスハート王国の国王。
息子フィルの才能に期待を
寄せている。

フィル・グレスハート

大学生・一ノ瀬陽翔が転生した
本編の主人公。目立たずに
ダラダラ過ごすのが夢。

登場人物

CHARACTER

1

「最低限の生活以上のことを望むな」

「我が家の恥にならない程度の成績は残せ」

「私に迷惑をかけるな、陽翔」

あー、またこの夢か……。

嫌なもの見ちゃったなあ。

思い出したくないのに、時々夢として現れる。

中学一年……両親が亡くなった際に母方の祖父から言われた言葉だ。

母方の祖母、父方の祖父母はすでにいない。他に身寄りがいない自分が生きていくために、この人の世話にならなければならないと知った時、初めて人生に絶望した。

せめてもの救いは、学業がそこそこ優秀であったことか。祖父の助けを借りずに奨学金で入学した高校は寮のあるところを選んだし、大学も同じく奨学金制度を使いながら家庭教師のバイトで一人暮らし。贅沢はできなかったが、祖父と一緒に暮らすより断然マシだ。

だがそばにいなくても、精神的な束縛はいつも感じていた。生活に追われることにも疲れてし

まった。

こうやって夢に見るたびに、つい考えてしまおう。
管理された優等生……そういうものではなく、何か別の自分になれなかったのだろうか。
のんびりゆったり、しがらみなく。ペットを飼って、モフモフ手触りに癒されて。
趣味の料理で美味しい物作って食べて。好きな人と温かい家庭築いて。
平日にめいっばい働いたら、そのぶん週末は好きな人や物に囲まれてダラダラごろごろ……。

ああ……思いつきりだらけたい。

重い瞼をゆっくりと開ける。部屋に差し込む光は、ひどく眩しかった。

こんなに明るいなんて、今、何時だ？ 寝坊した？

今日は何月何日で何曜日だろう。バイトの日だったか授業の日だったか……。

記憶があやふやでよく思い出せない。

目だけ動かして辺りを見回す。自分が寝ているのは、天蓋付きベッドのようだった。

白地に金糸の刺繍が入ったベッドカバー。ベッドの天蓋にある装飾は、美術館とかにありそうなアンティーク調。

天蓋から垂れ下がるカーテンも、臍脂色のベルベットに金糸の刺繍がされて、高級感たっぷりである。

こんなに大きなベッドを置いてもスペースに余裕がありそうなところから、相当大的な部屋だとわかる。

ここ……どこだっけ。何でこんなところに寝てるんだ？

視界に入る洋館の景色を眺めながら、まだとろりとした頭で考える。

正直、目覚めはあまりよくない。目が覚めても、頭が覚醒するのはまた別というか。毎朝、起きてからブーツとする時間がある。だからいつも、余裕を持って大学に行く二時間前には起きるようになっていた。

……何かおかしいな。

俺の家は、古い木造平屋のアパート。1DKで、広さ六畳の畳部屋だ。部屋の天井は杉板で、長年の間に付いたシミが不気味な柄になっている。ベッドはあつたが友人から貰った中古のシングルベッドだし、もちろん天蓋なんか付いていない。
それが、何でこんなところにいるんだろうか。

寝ばけているせいか頭が働かないなあ。いや、ちょっとズキズキと痛む。どこかにぶつけたのか？

……わかんない。

もう、考えてもわからないから寝ちゃおうかな。

さっきの夢は、きっと「だらけたい」という願望の裏返しだ。こんなに日が高くなっているんじゃないのか。遅刻だろうし、それならば諦めて今日は休んでしまおう。頭がスッキリしたら、もう

一度考えればいい。

よし、そうしよう。

モゾモゾと布団をたぐり寄せ、瞼を閉じて、意識を手放すべく息を吐いた。

だが、騒音が邪魔をする。耳元で誰かに話しかけられているのだ。

気持ちのよかったまどろみから呼び起こされて、思わず眉根を寄せる。

うるっさいなあ……誰だよ。

仕方なく目を開けて、騒音の原因を睨みつける。

「ああ！ 夢じゃないっ！ フィルが目を覚ました！」

さきほど見回した時は死角になっていて気づかなかったが、ベッドの傍らに人がいたらしい。

しかも、金髪碧眼のキラッキラな美少年。中世の王子様のようなヒラヒラの服がまたよく似合う。

……コスプレイヤー？

何でこんなところにコスプレイヤー。俺、まだ寝ぼけてるのかな？

「フィルが目を覚ましたと、他の者に知らせてくれ」

美少年は扉の外にいる誰かにそう声をかけると、俺の手をぎゅっと握りしめて瞳を潤ませる。

「フィル、何があつたか覚えてるかい？」

フィル？ 誰のことだ？

……俺のこと？

俺は生まれも育ちも日本だ。父母ともに日本人だし、四代遡つても全員日本人という、生粋の

日本人である。

だというのに、彼は俺をフィルと呼ぶ。そんな外国人みたいなあだ名、つけられたことがない。

だが……フィルという響きに、不思議と聞き覚えがあつた。

この金髪美少年コスプレイヤーだって、どこか見覚えがある。

何でだ……？

小首を傾げて考える。

「ああっ！」

声を上げ、俺はバツと勢いよく起き上がった。

「つつ！ いったああーっ！」

その瞬間、後頭部に割れるような痛みが襲う。頭を抱えてベッドに突っ伏した。

「フィルっ！ 大丈夫かいっ？ 急に動いてはいけないよ」

金髪美少年が俺の背中に手を添えて撫でてくれた。

痛みが収まっていくのと同時に頭が覚醒した。記憶の回路が、フラッシュバックとともに繋がっ

ていく。

巡るデータが多すぎて頭がパンクしそうだけど、そんなこと言っている場合じゃない。

辛うじて現実を把握したものの、あまりの衝撃に体がブルブルと震えた。それを抑えようと、自

らを抱きしめる。

それからゆつくりと腕を解いて、自分の手をマジマジと見つめた。

俺の手は——とても小さかった。

俺は小さな王国グレスハートの王国家三男。兄妹達を含めれば、五番目の末っ子王子だ。名前をフィル・グレスハートという。三歳半になった。

グレスハート王国は小さいながらも資源に恵まれ、人々も温厚な人間ばかり。この三年、辛いことも一切なく、幸せに育てられてきた。

そんな俺が、頭を打つてもう一人の自分の存在に気づいた。

……イタい人じゃないぞ。打ちどころが悪くて、おかしくなったわけじゃないから。

あれは前世だ。大学生の俺は、バイトに行くべく自転車で行っていた。そこに突然猫が飛び出してきて、避けた場所にトラックが突っ込んできたのだ。

運が悪いとしか言いようがない。即死だったのだろう。痛みを感じる間もなく意識がなくなったのはせめてもの救いだったが……なんてあつけないだろうか。

バイトがなかったら、猫が飛び出してこなければ、トラックが来なければ……タラレバを考えたらキリがない。だけど、あれだけ一生懸命すがりついた人生が、こうもあっさり終えてしまうとは思わなかった。

今までの苦勞を思うと、とても悔しい。人生長い目で考えていたからこそ、あの祖父の嫌味に耐え、貧乏生活を我慢してきたというのに。それが志半ばで終わるなんてあんまりだ。

ちえ、わかってたら、もうちょっと好き勝手やってたのにな。

俺が死んで、あの祖父はどう思っただろう。少しは寂しさを感じてくれただろうか？

うーん……想像できないな。

「あれほど言っておいたのに、とんでもない迷惑をかけおつて！」なんて言っているかも。

今はもう、確かめる術はないけど。

ともかく、俺は今世で王子フィルとして転生した。

といっても、自覚したのはついさつき。今の今まで、前世があったことさえ忘れていた。

というか、家の階段でドジっ子メイドに巻き込まれて転がり落ち、頭をしかたま打たなきゃ思い出さなかったかもしれない。

俺は傍で心配そうにこちらを見る金髪美少年を見つめ返す。

初めは混乱していたが、彼のことも思い出した。

彼は俺の一番上の兄アルフォンス。この王国の皇太子だ。

兄を忘れるなんて？ いやいや、仕方ないよ。何せフィルに物心がついたの、つい最近だし。アルフォンス兄さんも今は外国の学校の寮にいて、一緒に暮らしていないんだから。

兄は十四歳。俺と十一も離れているからか、とても可愛がってくれる。異国に留学中で大変だろうに、長期休みの時にはこうして毎日のように俺の部屋に遊びに来てくれる優しい兄だ。

あー……でも、ちよい可愛がりすぎかなあ。

前世の記憶がなかった時は、それが当たり前だったから何とも思わなかったけど。俺が何しても手放して褒めてくれる。立っても、座っても、ご飯食べても。

バカ……あ、ゴメン、兄バカなのかな？ ブラコンフィルターが凄まじい。

「アルフォンス兄さま、アリアは無事ですか？」

自分の口から甘ったるい子供の声が出ることに違和感を覚えながらも、気になっていたことを質問する。

アリア・カルターニは天然ドジツ子メイドだ。俺が階段から落ちた原因でもある。

三十過ぎだというのに童顔でどう見てもハタチにしか見えない彼女は、美人で可愛らしく、ふんわり柔らかい癒し系。俺を含め、城の皆に好かれている。

しかし、天然なドジっ子はいろいろやらかしがちなのがセオリー。ドアノブを壊して部屋から出られなくなったり、場所を勘違いして五時間そこで待っていたり。それが日常茶飯事^{さはんじ}。

今回の事故は、階段で俺と手を繋ぎながら転んだことが原因だった。

だから、手を繋ぎたくないって拒否したのに……。

「転んだら危ないですよ〜」

なんて、のほほんと言つて、逃げようとする俺を捕まえたんだよな。

幼いながらも、アリアと手を繋ぐと危険だつてわかつたのだろう。偉いぞ、三歳の俺！ まあ、子供がジタバタしようが、大人にや敵^{かた}わなかつたわけなんだが……。

あの時逃げるのを諦めたことが悔やまれる。あ、でも前世を思い出したんだから、よかつたとも言えるのか？

いや！ いやいやいや、一歩間違えば死んでたし。今だつて頭めっちゃ痛いし。

「アリアは大した怪我ではなかつたよ。階段を落ちる際、お前がアリアを庇^{かば}つたらしくて。捻挫^{ねんざ}と

打ち身で済んだそうだ」

「そうですか」

その辺りの記憶はあやふやだったが、大したことないならよかつた。つか、大人助けたなんて、幼児にしては上出来じゃん？

「さすがはフィルだ。偉いぞー」

アルフォンス兄さんも俺の頬をぶにぶにして褒めまくる。

あーもう、また始まつた。この人、俺を犬かなんかだと思つてないかな。褒め方がそういう感じなんだよな。

「やあぶえてくらさい」

十一歳の体格差は大きい。ぶにぶにを止めさせようとしても、無理な話だった。

「フィルは可愛いなあ〜」

ぶにぶにぶにぶにぶにぶにぶにぶに……。

抵抗を諦めた俺は、不満を露^{あらわ}にした目を兄に向ける。

まったく気づいてくれないけどねっ！

「兄様、フィルが嫌がつていますよ。病み上がりなんですから、そこまでしてあげてください」
宥^{なだ}めるように言つてきたのは長女のステラだ。俺が目を覚ましたという知らせを受けて来てくれたらしい。

銀髪に紫の瞳をした美少女で、十三歳ですでに儂^{はかな}げな色気を漂わせている。

兄弟の中で唯一対等にアルフォンス兄さんに意見できる人で、一番侮れない人だとも思う。なんて言うかなあ。にっこり笑っているのに目が笑ってない時があるんだよな。ああいう時ちよつと怖い。

「そうだった！ いつもの癖でっ！」

アルフォンス兄さんはハッと気がついて、ぶにぶにしていた手を慌てて離す。

アルフォンス兄さんもなあ。聡明で立派な皇太子と言われているはずんだけど、俺に関してはちよつと残念な人なんだよな。

「目を覚ましたと聞いたが、フィル大丈夫か？」

「もう痛くないの？」

次に顔を出したのは、次男のヒューバートと次女のレイラだった。

兄弟がそろったので、話しやすいようにベッドの縁に移動する。ベッドに腰かけた体勢になると、ステラ姉さんがガウンを肩にかけてくれた。

さすが、よく気がついて優しいなあ。

「ありがとうございます。ステラ姉さま」

お礼を言うと、ステラ姉さんは微笑みで返してくれた。

「ヒューバート兄さま、レイラ姉さま、頭はまだ痛いけど大丈夫です」

ヒューバート兄さん達に向き直ってにっこり笑うと、二人は安心したように顔を緩ませる。

「アリアを助けたのは男として立派だが、まだまだ筋力が足りないみたいだな。今度俺が鍛えてや

ろう」

ニヤリと笑ったヒューバート兄さんは、袖を捲って力こぶを見せつける。

それを見て俺は顔を引きつらせた。

筋肉至上主義なのか、やたらと人に鍛錬を勧めてくるんだよな。

十二歳にしてすでにマッチョの片鱗があるこの兄は、将来絶対ゴリマッチョになると思う。

金髪碧眼でアルフォンス兄さんと顔のパーツが同じなのに、印象がまるで違うのはそのせいだ。

本人も、頭を使うことは兄に任せて、自分は軍部の将軍になりたいと言っているし。ゴリマッチョになる可能性は限りなく高い。

俺だって、そりゃあポテポテしたお腹は嫌だが、かといって、ゴリマッチョはちよつと遠慮したい。

どちらかと言えば、アルフォンス兄さんみたいな、しなやかな筋肉が希望だ。鍛錬も護身術程度で充分と考えている。

そういうや前世では中学一年まで、近所にあった古武術の道場に通っていたな。祖父の家に世話になることになって、続けられなくなったけど。

徒手、刃物、さらには火器まで、様々な格闘技術を操る古武術。その中で俺の性格に合っていたのは、柔術だ。力で押し切るといふ考え方ではなく、相手の力を利用して倒す、合気道のような武術である。

この国でも、ヒューバート兄さんのように力こそ強さと考えている人が多いから、そんな相手に

柔術は相性がいいかもしれない。基本的な型はなんとなく覚えてるし、朝の運動として軽く取り入れてみようかな。

ヒューバート兄さんとの鍛錬は……断ろ。

絶対気合いで乗り切る軍人訓練になるに決まっている。体育会系のノリは、精神的についていけない。

しかしそんな俺の気持ちも知らず、ヒューバート兄さんはズイツと顔を近づける。

「どうだっ！ フィル、一緒に鍛錬しないかっ？」

うーわ、いつもの熱血だ。

どう断ろうかと考えていると、レイラ姉さんが間に割って入ってきた。

「ヒューバート兄様、絶対ダメよ！ フィルが筋肉ムキムキなんて。耐えられないわっ！」

「何を言う、筋肉は正義だぞ！」

「ヒューバート兄様のことはもう諦めたわ。どうぞ好きだけ鍛えてください。けど、フィルは絶対ダメ！ 筋肉なんてフィルにしたら悪よ！」

そんな会話をしながら俺の未来の姿を想像したのか、レイラ姉さんは「ああああっ！」と頭を抱えた。

九歳になるレイラ姉さんは、俺に一番歳の近い姉である。

縦にカールした金髪、ライムグリーンの瞳。性格はちょっと勝気だけど、愛嬌あいきょうがあつて憎めない。レイラ姉さんは俺の中のお姫様のイメージに一番びつたりだ。

「こんな天使がムキムキになるなんて。絶対許されないわ」

そう言って、むぎゅつと俺を抱きしめてくる。

痛い痛い。ヒューバート兄さんを止めてくれるのは嬉しいけど。全身打ち身だらけなんだから、締めるのやめて。

「そうだ、それは絶対阻止だっ！ フィルはそのままでもいいわ！」

アルフォンス兄さんも一緒に抱きしめる。

だから痛いんだって！ だいたいそのままって何っ！

ムキムキは嫌だが成長はしたいわ！ 希望身長は百八十超えですっ！

「心配していたけど……賑やかにしているところを見ると大丈夫そうね」

「フィルが目を覚ましたって聞いたのだが……これはどんな状況だ？」

笑いを含んだ声で、二人が入ってくる。両親のマティアス王と、フィリス王妃おうひだ。

このこの兄弟が美形揃いなのは、この両親あつてのことだろう。

顔の彫りが深く、若いながらも洗ヒキみのある父さんは、ハリウッドスターかというほどかっこいい。兄達が金髪碧眼で顔のパーツが似ているのは、父からの遺伝だとすぐわかる。

母さんも柔和にやわな美人で、モデルばりにスタイルがいい。腰まで流れるストレートの銀髪はサラサラと美しく、ライムグリーンライムグリーンの瞳が微笑ほほえましげに細められている。

これで五人の子持ちって嘘だろう。

「父上、母上」



アルフォンス兄さんは抱きしめていた状態から居すまいを正し、改めて二人にお辞儀をする。親子といえど国王と王妃、他の兄弟達もそれに倣^{まが}ってお辞儀をした。俺も礼をしようと身じろぎすると、母さんがそれを止める。

「フィル、そのままです。頭を打ったのだから下げてはいけないわ」

そう言っつて、優しい仕草で頬を撫でる。白く細い指先は柔らかく、嬉しいような気恥ずかしいような気持ちになつてしまう。父さんも体を屈^{かが}め、俺と同じ目線になつて優しく微笑んだ。

「無事でよかった」

その様子は前世の両親を思い起こさせた。前の両親は典型的な日本人だから、顔は全然違う。だけど、雰囲気がとてもよく似ていた。

やばい……泣きそう。

幸せな時間が、また戻つたような気がした。



「もう治つた……かなあ？」

瘤^{こぶ}のあつた辺りを鏡で確認しながら、うーんと唸^{うな}る。

俺が頭を打つてから三週間が経つた。全身の痣^{あざ}は消え、頭の瘤もなくなった。

一見完治したようだが、頭だからなあ。後遺症があとあと出てこないか心配だ。

それにしても……。
マジマジと鏡を見る。

そこには幼い少年が映っていた。

肌は白く透明感があり、まるで陶製の人形のような。くりくりと愛らしいグリーン色の瞳は、光の加減で色が変わる。艶やかな青みを帯びた銀髪は、天然パーマなのか、ふわふわとカールしていた。可愛い。めちゃくちゃ可愛い。

確かにアルフォンス兄さんやレイラ姉さんが、猫可愛がりするのも頷ける。レイラ姉さんが天使と謳うのも納得だ。

だがしかし……違和感ハンパない。

日本人は黒髪に黒い瞳、のっぺりした平たい顔が一般的だ。和顔を見慣れているところに、「これ新しい顔です」と西洋顔を持つてこられても、どうしたらいいかわからない。

なんて言うかなあ。たとえるなら特殊メイクとか、被り物でもしているみたいだ。

顔をムム二掴んだり引つ張ったりしてみる。

感覚はあるんだけど、これが自分だっという実感がまったくない。いつか慣れる日が来るのかなあ。

ため息をついて、鏡の前から自分の机に移動する。

「……はあ」

別の意味で再びため息が出た。

机には王宮図書館から運ばれてきた本が積み上がっている。

何で……何でこんなことになった？

遠い目で本の山を見つめる。

しばらくは療養ということでゆっくりしようと思っていた……。

いや、する気満々だった。したっていいと思う。だって頭打ったんだし。

だが二週間ほど経つと、ヒューバート兄さんが鍛錬に誘おうと部屋を訪れるようになった。

そしてそれを阻止すべく、アルフォンス兄さんとレイラ姉さんが現れるようになった。

さらにそれらを窘めるために、ステラ姉さんがやってきた。

はい。兄弟勢揃いです。

いや、いいんだよ。兄弟仲がいいのは素晴らしい。前世では一人っ子だったから、初めはめちゃくちゃ嬉しかったよ。俺を心配していることだろうなと思うし。俺そっちのけで取り合いするのは問題だけど、それも俺を大事にしているからだとわかる。

だけど、毎日はやめようよ！ ぶっちゃけダラダラしようと思ってたのにつ！

しばらくは頭痛い、体痛いという理由で逃げていたが、今度は一向に治らない俺を心配して、国内外から医者や薬師を集める始末。

俺は泣く泣く、勉強するから入らないでとお願いすることにしたのだ。

何だろ、この受験生が言うような「勉強するんだから、部屋から出てっつよ」的な感じ。

はじめは「何でいきなり勉強？」と疑問を持たれた。まだ三歳児だもんね。勉強に重きを置いて

いない時期ゆえに、皆が疑問に思うのも無理はない。

だが、「頭を打って記憶に不鮮明な部分があるから、王国のことを勉強し直したい」と言っただけとか納得してもらった。

どうしてこんな言い訳めいたことしなきゃならないかなあ。

まだ病み上がりだから大目に見てほしいだけなのに……。

こんなことを言った手前、多少なりとも形は作つときたい小心者の俺。部屋を覗かれた時に教科書も何もなかったら怪しまれるからな。カムフラージュはしとかなないと。

そのあたりのビビリ感が、記憶と一緒に前世からよみがえっているようで滅入るなあ。成長とも心強くなりませうにっ！

とにかく、そんなわけでメイドに書物を用意させた。

で、その結果がこの山積みの本。さすが王宮の図書館。蔵書ハンパない。

だが、持つてくるにしても限度があるんじゃない？ 多くて五冊から十冊くらいだよ、普通。

三歳児に百冊あまりの本を持つてくる人がどこにいるのさ。

「フィル様、最後の本ですよ」

アリアののほほんとした声とともに、台車に載せた追加の百冊が到着する。

……ここにいたよ。天然ドジっ子メイド。

しかし、アリアを責めてはいけない。彼女が天然ドジっ子メイドだと、俺はあらかじめ知っていたじゃないか。ちゃんと細かく指示しなかった俺がいけない。悪かった。

「ありがと、アリア。勉強するからもう下がっていいよ」

力なくお礼を言うと、アリアは「ガンバッ！」とガッツポーズして出ていった。

何か反対に脱力するよ、アリア……。

「さてと……」

本を目の前に腕を組んで唸った。

今回の言い訳、ある意味ちょうどよかったのかもしれない。

この国のこと、何も知らないからな。きちんと情報収集すれば、悠々自適なのんびりライフの対策も立てやすいというものだ。

「とりあえず、何から見るかな」

……ん？ ……あれえ？

タイトルを見て首を捻った。

「何語？」

アルファベットの表記に似ているが、形がなんか違う。そういや、俺、普通に喋ったり聞いたりしているけど、この国って何語？

……やばい。根本的な問題が浮上したぞっ！

たぶん三歳までの間に、俺の中にヒアリングで言語が形成されているんだろうけど、読み書きは真つさらってことか。

「読み書きの本でどこだ？」

バツサバツサと本の山を崩しながらあさる。

十分後、ようやく可愛らしい絵のついた薄い本を見つけた。

まさか一番下にあつたとは……。

読み書きの勉強が終わって全部読めるようになったら、タイトルで分類して整理しよう。いちいち今みたいに捜していたら時間がかかってしょうがない。

散乱した本の山を見つめて、固く心に決める。

絵本によると、この国の言葉は四十六文字。文字はアルファベットに似た形だが、母音と子音に分かれているのではなく、ひらがなと同じく一文字ずつ発音するようだ。そう考えると理解しやすくなる。

とくに一字ずつイラスト入りで解説されているのは大変ありがたかった。

問題は各イラストに添えられている文字をどう読むかだが、ある程度はわかる。先日アルフォンス兄さんに、イラスト集を見ながら名前を当てるといふゲームで遊んでもらったばかりだからだ。それでもイラストに書かれている文字がわからない場合は、すでに読み方が判明している別のイラストと照らし合わせ、そこから類推することにした。

よし、四十六文字すべて読み方がわかったから、試しにこの本のタイトルを読んでみるか。

「かんたんにわかるよみかき」

ふおー！ 読める！ 文章も日本語みたいに「誰が何をした」って順番になっているみたいだな。

助かる。

漢字などもないから、ひらがなで文が構成されているようなものだと考えていいだろう。なら、

四十六文字覚えれば「読み」はクリアだ。

「書き」もアルファベットに似た形のものと同様に合わせながら覚えていく。

練習は必要だが、文字は何か目処めどがつきそうである。

あと他に気になるのは、ここがどこなのか……だよな。

俺は世界地図らしき巻物を手に取った。地図には、王国の場所も記されている。

「……やっぱり」

日本どころか、アメリカやらロシアやら中国やらイギリスやら……そういう馴染なじみのある国が一つもない。

紙には、見たこともない世界地図が描かれていた。

あー……んっんー。これってたぶん、あれだよな。

「異世界……来ちゃってるよね」

は……ははは。

世界地図をもう一回見る。しかし、結果は同じだった。

まあ、うすうす気づいてはいたけどさあ。

理由1、さきほどの文字と言語。

俺の記憶だと、地球では文字と発音の関係がひらがなと同じようなものを用いる言語まは稀だ。

理由2、この国の服装。

この世界……というかこの国では、メイドや庭師などは軽装だけど、高貴な身分の人ほど、中世を思わせるドレスを着ていた。

理由3、前世で見たような文明の利器が見当たらない。

電気系統のものを見たことなかった。灯だって、ランプやロウソクだし。

いくらなんでも、こんなに時代錯誤の国なんかあるか？ 服も無駄に刺繍やひらひらが多くて機能的じゃないし、こんな王国があれば、日本でもきつとニュースになってるよ。

だから、なんとなくそうじゃないかなあと思っていた。前の世界と違うなーと。信じたくなかったけど。

文明の利器に囲まれた素晴らしき国、日本。

電気、冷蔵庫、車にテレビにインターネット、現代っ子に欠かせない携帯電話！

あの世界を知らない、この人々は幸せだ。でも俺の場合、あの娯楽に溢れた世界を知っているだけに、どうしても便利さを求めてしまう。

俺……早くも挫けそう。

2

異世界に転生し、前世の記憶を取り戻して、はや一年。

小さな王国の王子となつてのんびりスローライフ……と思いきや、この世界の常識を詰め込むのに受験生並みに学習している俺です。

前世で勉強漬けだった名残りかな。徐々に慣れていけばいいとは思いつつ、新しい世界を知りたいこともあつて読書が日課のようになっていた。

勉強を始めてから読んだ本、数百冊。日本語でいう「漢字」の概念がない「ひらがな」だけの文章は、とんでもなく読みづらい。おかげでものすごく時間がかかった。薄い本厚い本いろいろ読んだが、とりあえずわかったことがある。

この世界はデュアラント、ルワインド、グラントという三つの大陸に分かれている。

その大陸の中で最も小さいデュアラント大陸にグレスハート王国はある。

南方には海、北には山。海側には果樹園を主とした畑が広がり、山側には川と深い森がある。

四季はなく、気候は年中温暖。果物や野菜、穀物などの農作物が多く作られている農耕の国だ。暖かさど海風のおかげか、作物もめちゃくちゃ美味しい。

北に連なる山はこの国と他の国とを隔て、硬い岩肌は自然の防壁のようになっていた。

山の水が流れ込む川の下流では、川底を浚うと鉱石が採れるらしい。山には、鉱石が豊富に眠っ

ているのかもしれない。

小さいながらも豊かなグレスハート王国。すごく嬉しい。とくに美味しい食べ物が増えている。海の幸さき、果物まであるんだから。前世じゃかなりギリギリの食生活だったからな。ご飯と醬油しょうゆだけ、なんて日もあった。腹が減ると性格すま荒むよ。経験したからね。腹が減ると、暗いのと、寒いのは本当に辛い。貧乏は敵だ！ 高らかにそう叫びたい。

「フィル様、お勉強がんばっておいですか？ お茶を持って参りました」

「ありがとうございます」

アリアがワゴンを押して部屋に入ってくる。ワゴンには果物とお茶が載せられている。

机に運ぼうとするアリアを、俺は椅子から飛び降りて慌てて止める。

「あとはやるからっ！」

「ですが……」

「お願いっ！ あとはやるから！」

すがりついて、必死で頼む。

アリアはよくコケる。お茶を運ぶ時も何度かコケている。いつもハラハラしながら見守っていたのだが……ついに昨日、熱いお茶の入ったカップが俺に飛んできた。すんでのところで避けたけど。もうアリアのダイブは勘弁願いたい。

「じゃあ、ワゴンの脇に踏み台を置いておきますからね。お皿やお茶につけてくださいね」

「……うん」

その言葉、そのまま返したい。

「フィル様、今ほどの辺りのお勉強をしてらっしゃるのですか？」

優しく微笑んで、興味ありげに机を眺めるアリア。

「王国の気候と産業、他の国の位置関係はわかった。今は、森の生態系とかかな」

国のことはわかってきたが、王国に関する書物の内容はどれも農耕寄りなんだよね。知識かたよに偏りを感じて不安になってくる。

アリアは驚いたように目を瞬またかせた。

「ずいぶんお進みになりましたね。もしかしたらレイラ様やヒューバート様より学んでらっしゃるかもしれませんわ」

「え、そうなの？」

今度は俺が驚いた。この世界の学問は初級・中級・上級という段階があつて、俺は今、中級に入つたくらいだ。内容から見て、中級つて中学レベルくらいかと思つていたんだけど……。

「あれ、ヒューバート兄さまよりも？」

「ヒューバート様は、産業や商業などのお勉強があまりお得意ではないようですので」

アリアは困つたように微笑む。

……なるほど。勉強が嫌いと本人も語つてたしなあ。あんまりにもキツパリ言うから、清々すがすがしいほどだった。

「でも、ヒューバート様は強いですから！ きつと素晴らしい將軍になられますわ！」
フォローするように、アリアは明るい声で言い、俺は顔を引きつらせながら微笑む。

「そ、そうだね」

確かにヒューバート兄さんの武術の腕は相当のものらしい。今も部屋の窓から庭を見ると、鍛錬を人一倍努力してやっている様子が見える。尊敬できる兄だ。

とはいえ、將軍になるなら多少知恵もないといけなと思うんだけど……。まあ、そのあたりは将来に懸けるしかない。

「では、がんばってくださいませね」

「うん。あ、アリア！」

出ていきかけたアリアを呼び止める。

「はい。何でございますか？」

「あのさ、僕の勉強、どこまで進んだかは内緒にしておいてほしいんだ」

俺が言いくそうにしていると、アリアは首を傾げる。

「王様や王妃様にもですか？」

コクコクと頷く。

四歳児が十三歳の兄よりも勉強が進んでいるとわかったら、絶対神童扱いになっちゃうだろ。

中身が大学生だなんて夢にも思わないだろうからな。

天才だとかなんとかわかれて、あんまり期待されたら、困るのだ。「のんびり」が俺の夢なんだ

から。

「わかりました！ あとでビックリさせたいんですね？」

そんな俺を、アリアは盛大に勘違いしていた。

「う、うん」

「絶対にその時まで言いませんわ」

「よ、よろしく」

アリアがウインクとともに出ていくと、俺は脱力した。

本当に……黙っていてくれるかな？

不安を覚えつつ、踏み台を活用してお茶のセッティングをする。

お茶を一口飲むと、口の中に上品な甘みが広がった。このお茶はグレスハート固有種の果実の葉を茶葉としている。砂糖を入れなくても充分甘くて、疲れた時に丁度いい。

それから、傍らの果物にフォークを突き刺す。味も食感も林檎に似ているカルシュという果物だ。果肉の色がほのかにピンク色をしている。

そういや、食材は豊かな国だが、加工食品が少ないのは難点だなあ。魚や肉の塩漬はあるけど、燻製や一夜干しはない。果物系のデザートもほとんどなく、そのまま食べるくらいだ。

王宮の料理長に教えたら作ってもらえるかな？ 一夜干しの味わい深さや、懐かしの甘いデザートを思い出して、思わず唾液が出る。

あとは、文明レベルだよな。

カルシユをシャクシャクと食べながら唸る。

海外留学しているアルフォンス兄さんの話から察するに、この国だけじゃなく他の国もだいたい文明はヨーロッパでいう中世レベルかそれ以下のようだ。大きな大陸の大国になるともう少し発展しているみたいだが、技術はあっても革命的な発明などはまだまだな感じ。

だいたい電気自体がないみたいだから、それだと難しいことも多いしなあ。さよなら電化製品。便利な君達のいない世界に来て初めてその偉大さを知りました。エジソンとかこの世界に転生してくれてりゃいいのに。

口をモゴモゴさせながら本をペラペラ捲る。すると、あるイラストのところまで手が止まった。

耳の長いウサギを抱きしめてにっこり笑っている女の子の絵だ。その隣ではウサギが耳を使って小さな風を作っている。

『もりのどうぶつをつかえさせるほうほう』

へー。動物を従えるのか。野生の動物を手なづけるってことか？ それともペットトレーナー的な？

「えーなににな……」

イラストの下には概ね次のようなことが書かれていた。

『森の動物と主従契約を結びましょう。森の動物は、属性に応じた様々な能力を持っています。動物によって火をつけてくれたり、風を送ってくれたりします。彼らと契約し従えることができれば、あなたを手助けしてくれるかもしれません』

属性かあ。前世のゲームなんかでよくあった、火・水・土・風……みたいなことかな。

次のページには何種類かの動物が紹介されている。

『ナガミミウサギ、風を起こせる。ハナドリ、火を吐く。チャガメ、道を教える。契約した動物は、好きな時に呼び出せるようになります。いろいろな動物と仲良くなりましょう』

「へえ、契約、いいな！」

契約する動物によって能力が違うみたいだが、動物ゲットしてそれを活用すれば、生活はかなり便利になるだろう。

それに、挿絵には愛らしい動物達が描かれていて、なんか欲しくなってきた。ペット飼ってみたかったんだよなあ。祖父は動物嫌いだったし、寮でも無理。一人暮らし時代は極貧でそんな余裕なかった。友達の猫や犬が可愛くて、彼らが羨ましかったのを覚えている。

これはモフモフするチャンス！ よーし！ 契約するぞー！

やる気満々で、ページをペラペラ捲る。

『契約するには動物と気持ちを交わさなければなりません。気に入った動物がいたら話しかけてみてください。敵ではないと示すことが重要です。一緒に歌ったり踊ったりしてみてもいいです。動物によって好みがあるので、いろいろ試してみてください』

え、歌ったり踊ったり？ マジか。なるべくその方法は取りたくないなあ。

『動物は、従ってもいいと思ったら、あなたに頭を下げます。それが契約のサインです。契約時に名前を付けてあげてください。付けた瞬間に契約完了となります。ただ、中には危険な動物もいま

すし、失敗することもあります。まずは、小動物から始めましょう』
ふむふむ。小動物からね。よし、勉強はとりあえず中断して、ペットをゲットするぞー!!



契約により呼び出される動物はすべて「召喚獣しょうかんじゅう」と呼ばれるらしい。

兄弟での夜のティータイム中、この召喚獣について聞いてみた。

「アルフォンス兄さまたちも、召喚獣持つてるんですか？」

アルフォンス兄さんの膝ひざの上、抱っこされながら兄を振り返る。

言わないで！ わかっているから！ 俺だって不本意です。この年になって膝抱っこ……。

周りから見たら微笑ましい兄弟なんだろうけど。今や俺も天使のごとく可愛い盛りだし。

それでも膝抱っこなんて冗談じゃないと思った。だってまだ気持ちは男子大学生だよ？ 想像し

てみてよ。

——男子大学生が、金髪碧眼の美少年に膝抱っこ。

変態だよ。変態の匂いぶんぶんするよ。自分のことながら鳥肌もんだよ。

だが、ステラ姉さんやレイラ姉さんが「嫌ならこっちへ」と名乗りをあげたため、仕方なくアルフォンス兄さんの膝に収まることになった。

いくら何でも女の子の膝は……精神的に落ち着かない。申し訳ない気持ちにもなるし。騙だましてる

わけではないんだけど。

そんな俺の気持ちなどわかるはずもなく、アルフォンス兄さんは俺の頭を撫で回す。

「私の召喚獣は、もうそこに控ひかえているよ」

「え、どこですか？」

アルフォンス兄さんの視線の先には、ふわふわのクッションがあった。

「ラル」

アルフォンス兄さんが呼ぶと、クッションがもこもこ動く。

「わわわっ！」

ビックリした!! クッションだと思っていたのは、もこもこの毛をした猫だったのだ。といても毛に埋もれて、顔や短い手足がよく見えないけど。

「毛玉猫と言ってね。熱を帯びる性質があって、冷える夜はそばに置いておくとあったかいんだよ。ベッドに入るとふわふわで気持ちいいし」

ふわふわの湯たんぽっ!! 何それ、めっちゃ欲しい。

温暖な気候と言っても、夜は少し肌寒い。こんなペットがいたら、とてもありがたい。

「僕も毛玉猫欲しいです！」

「そうか。森に比較的多くいるから、契約してもいいかもしれないね」

「何体もいるものなんですか？」

「毛玉猫はそんなに珍しくもないからね。あと他にも、いろいろな召喚獣と契約しているよ」

「へえ」

毛玉猫をはずひ契約したいなあ。

「フィルは召喚獣の勉強に興味津々みたいだね。まさかもう召喚獣を捕まえるつもりかい？」
優しい声にギクリとした。

ヤバイと思って、俺は慌てて首を振る。だが、それはアルフォンス兄さんの冗談だったようだ。俺の焦る様子を見て笑う。

「そんなわけないか。しかしフィルは勉強熱心だね。あつという間にヒューバートを追い抜きそうだな」

「兄上、ひどいじゃないですか」

ヒューバート兄さんがむくれて抗議すると、隣でレイラ姉さんがクスクスと笑う。

もう追い抜きました、とは言えない……。

「ヒューバート兄さまは持つてるんですか？」

「俺か？ もちろん持つてるぞ。レイラはまだみたいだけだな」

さきほど笑われたことの意味返し、ヒューバート兄さんはレイラ姉さんを見てニヤリと笑う。

「私も、もう少ししたら持つ予定です！」

レイラ姉さんは頬をぷっくり膨らませて睨む。その様子にヒューバート兄さんは満足そうな顔をした。

「フィル、俺の召喚獣見たいか？」

ヒューバート兄さんは背を屈めると、いたずらっ子のような顔で俺を見る。俺はワクワクしながら大きく頷いた。

アルフォンス兄さんの膝から下りて、ヒューバート兄さんがどうやるのかをジッと見つめる。

「カエン！」

動物の名前が召喚のきっかけなのだろう。ヒューバート兄さんは力強く叫んだ。

すると、空間が揺らいで小さな生き物が現れた。手乗りサイズの赤い動物だ。アルマジロのような背中をしている。

「これはガロンという種の、火属性の動物だ。カエン、弟のフィルだ。仲良くしてくれよ」

カエンはヒューバート兄さんに、クエと返事してこちらに向き直る。

【隊長の弟様ですな。よろしくお願います】

喋ったーっ!!

ビククリして口をボカンと開く。

こっちの動物って喋るんだ？ 召喚獣になったら喋るのか？ わかんないけど、とにかくすごいな。

「初めまして。よろしくね、カエン」

「カエンは戦闘系なんだぞ。まあ、ここじゃ見せられないけど……」

「そうなんですか？」

この小さいのが戦闘系？

そんな感想が顔に出ていたのか、カエンはムツとしたように俺に向かってクエと鳴いた。

【信用しておりませんか？ ならば見よ！ こうして、このようにっ！】

カエンはコロリと丸まって野球ボールのようになる。

「え、あっ！ ちょっと待てカエン！」

焦るヒューバート兄さんの制止も聞かず、カエンは全身に火を纏いながらゴロゴロゴロと勢よく転がっていった。

高級そうな絨毯を焦がしながら……。

控えていたメイド長が悲鳴を上げている。

「ヒューバート、しつげがなっつていませんね」

冷たさを含んだ声で、ステラ姉さんが微笑む。

いや、本当に辺りがひんやりしている。見るとステラ姉さんの肩に水色の小鳥がとまっていた。

「ステラ頼む」

アルフォンス兄さんがステラ姉さんに言うと、頷いて小鳥に向かって囁く。

「ピア、あれを止めて」

ピュイと返事をして、小鳥は飛び立った。滑空して向かった先は、未だ転がっているカエンだ。

ピアのクチバシから小さな吹雪が出る。それがカエンに直撃すると、次第に炎が消えていき、カ

エンはそのまま壁にぶち当たった。目を回したカエンは、クエと鳴いて大の字になる。

「カエンッ！」

ヒューバート兄さんはすぐさまカエンの回収に向かった。

ステラ姉さんの肩に再び戻ったピアは、その様子を冷めた様子で見下ろす。

【ふんっ、あんな熱血漢、私にかかれば大したことないわ】

わー、ツンツンしてる！

小さいのにツンとした様子が可愛くて、思わず顔がほころぶ。それに気づいたピアが、俺の肩に飛んできた。

【姫様の弟さんね。私はピア、氷鳥と呼ばれる鳥よ。能力については今見せたとおり、氷を司っているわ。お楽しみいただけただけかしら】

「とてもすごかったよ。よろしく、ピア」

にっこり笑うと、返事をするようにピュイッと鳴く。

すると、それを見ていたレイラ姉さんが「あー！」と声を上げて近づいてきた。

「フィルいいなあっ!!」

「え？」

レイラ姉さんはピアに向かって「こっちおいで」と手を差し出す。だが、ピアはふいっとレイラ姉さんから顔を背けた。

「何でえ？ 私だって仲良くしたいのに」

悲しそうに眉を寄せるレイラ姉さん。

「ピアが私以外に懐くのは珍しいのよ」

ステラ姉さんは微笑みながら、俺の肩に乗るピアを撫でる。

「へえ、そうなんですか」

【姫様の兄弟でも、騒がしいのは嫌いな。あの熱血漢の主人も嫌い。あなたは好きよ。分別ありそうなもの】

正直な小鳥だ。

「あ、ありがとう」

「氷鳥は希少な上、気位の高い鳥だね。召喚獣にするのは難しいんだ。やっぱりフィルは可愛いさが滲み出てるから懐かれたのかなあ」

アルフォンス兄さんはにこにここと、俺の頭を撫でる。

【ちなみにその王子も受け付けないわ。何か気持ち悪いもの】
本当に……正直な小鳥だ。

◇ ◇ ◇

「んーっ！」

背伸びをして息を大きく吐いた。

ここは城の外にある丘。

久しぶりに城の外に出たなあ。召喚獣の情報収集に夢中になっていて、気がついたら引きこもりみたいになっていたから。

久々の外は気持ちいい。気候も暑すぎず寒すぎず、日向ぼっこに最高だな。

今度来る時は、レジャーシート代わりのものを持参してゴロゴロしよう。

さて、今日は召喚獣にする動物を見つくる予定だ。といってもまだ四歳児、移動距離なんかたかが知れている。だから城のすぐ近くの丘を探索しよう決めていた。

ここから少し離れたところにある森に比べて、レベルが低く役に立つ能力も少ない動物ばかりらしい。でも初めての召喚獣だから、ちょうどいいかもしれない。

歩き出そうとして、そと城を振り返る。騒ぎにはなっていないみたいだ。

実は、裏の丘だしすぐ戻ってこられる距離だと思い、城の皆には内緒で一人で来ている。

申し訳ないとは思うが仕方ない。一応王子の俺が城の外に出るとなると、護衛十人、メイド数人付けるって母さんが言うんだもん。いくらなんでも多すぎだって。

四歳児の王子を城外に一人で出せない気持ちはわかる。俺だって立場が逆なら、心配で護衛どころか自分もついて行っちゃうかもしれない。だが、メイドだの護衛だのがゾロゾロついてきたら大変困るのだ。

もし召喚獣にしたい動物と出会えても、大勢いたら警戒されて契約できない可能性もあるし……いや、正直に言おう。問題はそこじゃない。周りに人がいると、契約時に心配なことがあるのだ。会話が契約できりゃ万々歳。だけどあの本に書いてあったように、歌ったり踊ったりしなきゃな

らない場合もある。

歌には自信ないし、踊りだつて、フォークダンスと盆踊りくらいしかできない。そのどちらも、曲とある程度の人数がいて初めて成り立つものだ。

そこまで考えて、中学の体育祭実行委員長だった時のことを思い出す。お手本のため全校生徒の前で一人でやらされた盆踊り。

思い出して思わずグワアと頭を抱える。

あれは恥ずかしかった！ 何で人一倍がんばっている委員長が公開処刑されなきゃならないんだ。皆、小学校でも教わっているんだから、中学になって改めて教える必要なんてないはずなのに。多感な思春期に何してくれてんだ、体育教師。

ひとしきり頭を抱えたままジタバタして、ピタリと止め、もう一度ため息をつく。
なぜ、転生してまで過去のトラウマに悩まされなきゃならないんだろう。……忘れたい。

「ばれる前に戻ればいいよな」

気合いを入れ直し、城壁に向かって歩き出す。

正門や裏門には衛兵がいる。ここを抜けることはほぼ不可能。しかし城壁には外に出られる穴がある。ヒューバート兄さんが勉強をサボる時に使う抜け穴だ。

城の防壁力、これで大丈夫なんだろうか。少し心配になってしまう。

穴を隠している木の枝を、息を切らしながらどける。幼児の体では何をすることも大変だ。

何とか撤去を終え、抜け穴にソロリと頭を突っ込む。

「誰もいないな」

向こう側を確認し、ヨイショと城壁を抜けた。服の埃を払い、周囲を見回すと、すぐ横に小高い丘があった。

よし！ 気づかれないうちに早く行こう。

丘に向けて走り出す。だが、すぐに立ち止まった。ゼイゼイと肩で息をする。

足が短い……。幼児体型おそろしや。

平地は大丈夫だったが、坂になると頭が重くてバランスを崩す。気を抜いたら、そのまま後ろに転がりそうだ。

ああ、早く成長してくれないかな。体力もなさすぎるし。トレーニングも兼ねて柔術を活かした朝の体操をやっているのになあ。すぐに筋力はつかないか。

二の腕をつまむと、ふにふにと柔らかい感触がした。先は長い。

体が弱いわけではないみたいなんだけどなあ……。

ため息をついて歩を進める。ただの小高い丘なのに、上るのにだいぶ時間がかかってしまった。

ゼイゼイしながら城を振り返る。

くそー、帰る時は転がったほうがいいのか？ つい悔しさで荒んだ発想をしてしまう。

ま、帰りの時のことはいいか。気を取り直して、探索しよう。

丘の頂上は野球グラウンドくらいの広さがあった。俺のお腹辺りまで伸びた草が一面に広がっている。

奥には背の低い木が密集し、茂みもあるみたいだな。

うーん、その茂みに、ちらほら動く何かがいるみたいんだけど……。

俺が近づくと、パツと隠れてしまう。草でよく見えないし。

「こーんにーちはー」

歌のお兄さんのように明るく呼びかける。

本当は姿を見せた時に一対一で語りかけたかったが、茂みから出てこない以上、どうにもならない。

「僕とお話ししませんかー！」

すると、四方八方から動物の鳴き声が聞こえ出す。何やら様子を窺^{うかが}っているようだ。

【あんな小さな子供がどうしてここにいるの？】

【こんなどこ、普通一人で来ないわよね】

【何か怪しいわ】

【俺達をどうするつもりだ】

小声でざわめいている。

うーわ、めちゃくちゃ怪しまれている。

【時々やってきて何か叫んでいる子の仲間かしら】

【ああ、「筋肉は正義」とか言ってるやつ？】

【迷惑よね。あれ】

……ヒューバート兄さんのことだ。動物にまで迷惑がられているなんて。何だかかわいそすぎて涙が出そうだな。

これはあれか……踊れつてことか。こちらに敵意がないということを示さなければならぬのか。どうする。どうする俺。

トラウマがモグラみたいにひよこひよこ顔を出す。だけど、正直ここまで来て成果もなしには戻れない。

「踊ります！」

仕方なしに盆踊りを始めた。

最後に踊ってから何年も経つのに、不思議と忘れないものだ。

無音で踊っているから、自分の手拍子がやけに辺りに響く。

うう……一発芸やって、静まり返った宴会場みたい。

だがしばらくすると、様子を見ていた動物達が少しずつ集まり出した。しかも、俺の後ろについて、真似するように踊り出す。

「おおおお」

か、かかか可愛い！

頭に角のあるウサギや、耳の大きなキツネ、小型犬くらいあるリス、他にも見たことない動物がいつぱいいる。俺と小動物たちが輪になって盆踊り。踊りは渋いが、メルヘンなことこの上ない。

嫌々始めたのだが……踊りの力はずいものだ。一周り二周りとお踊るほどに連帯感が生まれる。

いつしか、動物達と笑いながら盆踊りを楽しんでいた。わはは、めっちゃ楽しいっ！ あり得ない状況すぎる。だが、突然動物達が蜘蛛の子を散らすようにいなくなつた。

「え、あれ？ どうしたの？」
急にポツンと取り残され、俺は辺りを見回した。そして俺の瞳が、ゆっくりと近づくと近づく大きな影を捉える。

【変わった毛並みの者がいるな……】

笑いを含んだ言葉は、どこか値踏みするような響きがあった。

大きな黒い狼だ。子供どころか、大人だつて楽々背に乗れそうな大きさをしている。

しかし、それより何より驚いたのは色と毛並みだった。烏の濡れ羽色かすずめとはこのことだろう。

黒い艶やかな毛が全身を覆い、二つに分かれたフサフサの尻尾しっぽが優雅に揺れている。

「わあああ、綺麗だ」

思わず感嘆の声が漏れる。すると狼は楽しそうに目を細めた。

【我が怖くないのか？】

問われて、すぐ首を振つた。

「何で？ こんなに綺麗なのに」

【大方は、そこにいる奴らのような反応を見せるんだがな】

改めて周りをよく見ると、一緒に踊っていた動物達がブルブルと震えて遠くで固まっている。明

らかに怖がつていた。

この狼はあの動物達より上位なのかな？

そういえば、時々森から動物がやってくるとアリアが言つてたっけ。だから護衛が必要なんだと。

だが、やはり怖い気持ちにはなれなかった。

犬派か猫派かと言われれば、断然大派だ。

二つに分かれた尻尾と、巨体以外、この狼に犬との違いを見つけられなかったからだろうか。

怖さよりも、ふわふわした綺麗な毛並みのほうが気になった。

狼は興味ありげに俺の周りを回る。目の前を通りすぎるたび、尻尾がゆらゆらと揺れて俺を誘う。

「めちやくちや触り心地よさそうだね」

俺の言葉を聞くと、狼はクククと噴き出すのをこらえるように笑つた。

【さっきの踊りといい、おかしな奴だな】

盆踊りのことは言わないでください。

でも笑ってくれたので、少しくだけた気持ちになる。

「お願いがあるんだけど……」

【何だ？】

「撫でてもいい？」

勇気を出して聞いてみると、狼は触りやすいよう体を寄せてきた。近くで見ると、毛の一本一本が細いことがわかる。

立ち読みサンプル
はここまで

おずおずと触れる。まるで上質な毛布のような柔らかさだった。しかも、毛足が長いからポリリュームたっぷり。

我慢できず……思いきってポスンと顔を埋める。

「ふあああ気持ちいい〜」

叫ぶことならば、ずっとこうしていたい。そのくらいの心地よさだった。

【やはり変わった子供だな】

狼はくっくくつくと笑う。おかげで胴体に乗せていた俺の頭も、笑いととも揺れた。

動物に変だと言われるとは……。

【お前の名前は？】

「フイル」

伏せをしてくれたので、狼の上にダイブしながら俺は答える。

モフモフすぎてこのまま眠っちゃいそう。

【子供が一人、なぜこのようなところに来た】

【このようなどころって……？】

毛並みを堪能していた俺は、顔を上げて首を傾げた。

【この丘には、ある獣がいる。城はその獣を封印するために造られたのだ】

え、何それ。初耳ですよっ！

ガシツと狼にすがりついて聞く。

「ここ、可愛い小動物しかいないんじゃないの？」

【小動物もいるがな。強い動物は、人が来ても姿を見せないだけのこと。弱すぎて相手にならぬからだ】

狼は馬鹿にしたようにふんつと鼻で笑う。俺は驚愕した。

「ええ、そんなの聞いてないよ！」

狼は何を今さらと呆れたように言うが、俺は初耳ですから！

あ、もしかして中断した勉強の中にそんな情報があったのかな？

しまったー。せめて召喚獣の本の最後まで終わらせておけばよかった。

【ちなみにそこから踊っていたのも、姿形は可愛かろうが能力はそこそこある。大人ならまだしもお前のような子供など、襲われたらひとまりもなかったらう】

そう言われて、愕然とする。

あんなにメルヘンチックだった踊りの輪。だが見方を変えれば、途端に俺という生け贄を捧げる儀式だ。

あんなに連帯感があったのに。ま、まさか……。

「も、もしかして食べる気だったー？」

慌てて遠巻きに見ている動物達に叫ぶ。すると、動物達ほとんどでもないと言うようにブルブルと首を振った。

「よかった」